

「キャリアセミナーⅠ」新規導入の報告

— 仮想設定によるキャリアデザイン体験演習 —

岩崎 敏之^a 長谷川 文代^a

^a湘北短期大学生活プロデュース学科

【抄録】

架空の湘北生を想定し、その人生のシナリオを作成して生き方を疑似体験する、という授業科目「キャリアセミナーⅠ」を平成19年度より新たに実施した。その結果、多くの学生に対し、仕事、家庭、家計、さらには年齢に伴う自身や家族の変化について、体験的に学ぶ機会を提供することができた。ここでは、その授業の意義を述べ、取り組み内容を紹介し、今日のキャリア教育のあり方についての提言を行う。

【キーワード】

キャリアデザイン キャリア教育

I はじめに

政府でキャリア教育等推進会議が行われ、社会においてキャリア教育の必要性が広く認識されている今日、産業界ならびに教育界では、キャリア教育のための教育プログラムについて、さまざまな取組がなされている。

キャリア教育には、学生自身が、自らの気づきや自己啓発といった内面的な部分に触れる側面と、就労することを意識して社会や企業について理解するという側面の2つがある。この2つの側面についての教育プログラムは、往々にしてばらばらに提供されるケースが多く、学生は自分でそれらを統合してキャリアデザインを行わなくてはならない。ところが、自分の特徴や強み、あるいは

は興味の対象を知ることと、求人募集がなされている企業の情報や広く社会の状況について知ることの両側面を結びつけるには、かなりの工夫や努力が必要であり、その作業を学生の自主的な思考や活動に委ねては、キャリアデザインのための支援を十分にしていることにはならない。

そこで、筆者らは、「キャリアセミナーⅠ」という授業科目を平成19年度より新たに実施した。架空の湘北生を想定し、その人生のシナリオを作成して生き方を疑似体験する、というものである。ここでは、その授業の意義を述べ、取り組み内容を紹介し、今日のキャリア教育のあり方についての提言を行う。

II キャリア教育の目的

キャリア教育は、その目的として、学生一人一人の意識を対象として認識することと、社会のこ

<連絡先>

岩崎 敏之 iwasaki@shohoku.ac.jp

とを知ることの2つの側面を持っていることを確認する。しかしながら両面を一体としてキャリア教育を行う必要性も、すでにはっきりと認められている。

1. キャリア教育推進会議の提言

平成19年5月29日にキャリア教育等推進会議(構成員：内閣府特命担当大臣(青少年育成)、文部科学大臣、厚生労働大臣及び経済産業大臣)において、若者が望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識等を身に付け、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てるキャリア教育等の推進を図るために、「キャリア教育等推進プランー自分でつかもう自分の人生ー」が策定された。その中で示されている(キャリア教育等の意義)を、少し長くなるが以下に引用する。

「キャリア教育等は、その実施を通じて、青少年一人一人の個性・特性を見極め、将来の進路と日々の教育活動の意義とを結び付け、社会的自立に向けた力をはぐくんでいくものである。それは学校にとっては、職場体験の実施等を通じ、産業界や地域社会との対話を得る機会の増大につながり、教育課程編成の改善や見直しを促すとともに、産学連携教育の一層の推進に資するものである。さらに企業等にとっては、職場体験者の受入れ等を通じ、若者の就業に対する理解を促進させ、実践的な能力を備えた人材の育成に寄与するものである。また、地場産業が受入先となることにより、若者の地域に対する愛情をはぐくみ、地場産業や地域工芸等に対する理解促進・継承に資するものである。そして、我が国全体としては、自立した青少年を世の中に送り出すことにより、少子高齢化による労働力人口の低下を補う労働生産性の向上に寄与し、活力ある経済社会の発展に資するものである。また、結婚には経済的基盤や就業等についての将来の見通し・安定性が大きな影響を与

えていることから、キャリア教育等を通じた社会的自立の促進は、少子化対策にも資するものである。」

ここでは、一人一人の個性を見極めることと、職場体験などによって社会と触れる場を設けることにより就労意識を高めることの2つが意識されている。とりわけ職場体験や産学連携という形での、社会体験を行うことの意義が強く主張されている。しかし、個性の見極めをするということと、社会体験をするということとをどのようにつなげるかという点に関しては、何ら触れられていない。

2. “career development” の2つの訳語

渡辺三枝子編著「キャリアの心理学」⁽¹⁾の結びに、英語で書かれたキャリアに関する理論を日本語に翻訳する際、どの言葉に置き換えるかの困難さについての記述があり、“career development”という言葉をも、「キャリア発達」と訳すか「キャリア開発」と訳すかという点に触れている。そこでは、心理学を背景とする人々は「キャリア発達」と訳し、経済学、経営学を背景とする人々は「キャリア開発」と訳していると結論づけられている。つまり、キャリアの問題について考える際には、個人の心理の問題なのか、社会における就労の問題なのかという大きく異なる2つの立場が存在しているのである。従って、そのような両側面があることを意識せずに、学生のキャリア形成を促すために必要な事柄を教えようとする、各要素をばらばらに提供する結果となってしまうことが起こり得る。

3. キャリア発達の心理学

前項で述べた「キャリアの心理学」に記されているアメリカの二人の心理学者の理論を紹介する。

1) Edger H. Schein

人が生きている領域を次の3つのサイクルに分けている。

- ① 生物学的・社会的サイクル
 - ② 家族関係におけるサイクル
 - ③ 仕事・キャリア形成におけるサイクル
- ①、②を「内的キャリア」、③を「外的キャリア」と区別をして、捉えている。

2) L. Sunny Hansen

総合的生涯設計 [ILP (Integrative Life Planning)] として、次のような6つの人生の課題が提示されている。

- ① グローバルな状況を変化させるためになすべき仕事を探す。
- ② 人生を意味ある全体像の中に織り込む。
- ③ 家庭と仕事の間を結ぶ。
- ④ 多元性と包括性を大切にする。
- ⑤ 個人の転機 (transition) と組織の変革にも対処する。
- ⑥ 精神性 (spirituality), 人生の目的, 意味を探究する。

おもに②、④、⑥は個の発達に焦点をあてたもので、①、③、⑤はより外界や状況との関係に焦点を充てたものであるという指摘がなされている。

それらを見ると、単に仕事のみをキャリアの要素として捉えていないことが分かる。

4. キャリアの本質

上述の渡辺氏は、別の著作において次のような重要な指摘をしている。

「キャリア教育の実践に当たっては、キャリアという言葉に秘められた本来の概念が非常に重要な意味を持つのは、キャリアが職業という言葉と異なり、『個人が、仕事や職業、職場環境との交互

作用を通して、編みだす、個人の経験の世界』を意味するからである。社会・経済を取り巻く状況や産業構造が激変するなかで、若者のみならず、我々職業人自身が、自分自身の生き方と『働くこと』との関係を決め、選ばなければならない課題に直面させられる時代に入ったことは確かである。こうした時代の転換期にあつて、将来のある若者の自立と幸せを願うなら、若者自身が自分の生き方としてのキャリアを築いていく責任が取れるように何ができるかを追求しなければならない。」⁽²⁾

ここでは、そのために「キャリア」の本来の意味にたち変えることが答えの一つであると記されている。単に就職を支援することがキャリア教育ではないという主張である。

Ⅲ キャリア教育の道具

厚生労働省所管の独立行政法人労働政策研究・研修機構 (JILPT) が運営しているキャリアマトリックスという職業に関する総合的な情報データベースがある。同機構のホームページでは次のように紹介されている。

「数百にのぼる職業の概要や写真、その職業に就くための方法等の情報が提供されています。さらに、職業に必要なスキルや知識などの情報も収録されており、様々な職業を探索したり、自分に向いている職業をこれまでの経歴や心理テストからチェックすることができます。また、キャリアマトリックスの重要な使命は、具体的な職務内容を示すことによって個々の「職業」を明確にし、求人求職、キャリア開発、人材マネジメント等の分野において「仕事、職務」についての共通理解を助けることです。自分のやりたい仕事を探す人々と、特定の仕事・職務に欲しい人材を探す企業を結び付けるうえで、その「仕事」についての

共通の理解が不可欠です。このような共通言語を提供するのがキャリアマトリックスです。」⁽³⁾

そのデータベースは登録されている職業の数が多い。また必要な資格も分かり、その仕事の様子が映像で紹介されているものもあって、結構具体的なイメージをつかみやすいので、職業調べを行うにはかなり良くできた道具であるといえる。しかしながら、上記の紹介文の内容からも明らかのように、職業や仕事の情報を得るためにのみ有用なものである。よって、キャリアデザインを行う際、就労に関しての検討材料としてしか使えないことを認識しておくべきである。なぜなら、学生一人一人の実人生においては、やりたい仕事に就くということが、必ずしもキャリアデザインの最重要条件とならないからである。仕事だけではなく、家庭生活なども含めて幅広く想定したキャリアデザインを行う中で、あくまで職業について考えるための道具であることを理解したうえで利用すべきである。

Ⅳ 「内的キャリア」と「外的キャリア」の

不一致を克服するためのキャリア教育

Edger H. Scheinが主張する「内的キャリア」と「外的キャリア」を、別々なものとしてではなく、2つを統合した形で捉えるように仕向けるキャリア教育を行うためには、一連の人生ストーリーのシミュレーションを行うことが有効であると思われる。その場合、学生一人一人が自分のキャリアデザインを試みるべく作業を進めると、シミュレーションであるがゆえに好きなようにあまりに非現実的な人生を描いてしまう場合と、シミュレーションといえども真剣に現実的に考えすぎて夢を失い失望感を得てしまうような場合と、両極端のケースが出る可能性がある。ある程度現実味を帯びていながら、なおかつ学生が失望感を味わ

うことのないようなプログラムを提供することが望ましい。

そこで、「キャリアセミナーⅠ」という科目では、グループワーク形式で、架空の湘北生を一人想定し、その湘北生の人生ストーリーを考えていくというやり方で実施した。ライフプランナーを外部講師として招き、具体的な家庭生活の収支を検討するライフプランニングを行う時間も設けた。それにより、想定した内容をより現実味を帯びたものとして検討できる環境を用意した。

Ⅴ 「キャリアセミナーⅠ」の授業内容

「キャリアセミナーⅠ」の授業は、以下の通り実施した。

1. 授業概要

学生に対する授業概要についての説明文は、以下の通りである。

「グループごとに仮想の湘北生の人物像をつくりあげ、その人物が歩む人生のストーリーをつくり上げていきます。その際に、仕事や家計、家族、生き方という点において細かなディテールまで練りあげていくことにします。具体的な内容まで検討していくことにより、社会で生きるということについて学び、自らの人生のストーリーを描くことができるようになります。」

科目のサブタイトルとして、「シンデレラストーリーをつくろう」と加えた。

2. シラバスの授業計画

シラバスに記された授業計画は、下記の通りである。

第1課題：シンデレラストーリーをつくる

仮想でありながらも、ありえそうな現実味を帯びた設定の湘北生を、グループごとに1名つくり

あげます。(設定項目例:氏名 居住地 家族構成 趣味 得意 不得意 性格のイメージなど)その湘北生が35歳の時にどうあってほしいかというイメージを決めた上で、そのイメージに向かって、どのような生き方をするのかというストーリーを作り上げていきます。

・途中イメージする段階

卒業時, 25歳, 35歳

・作成資料内容例

1週間のスケジュール, 月間の収支簿, 身近な人物との想定会話文, 就職・転職時の履歴書, 結婚式でのスピーチ内容など

- 1回目 概要説明 設定準備
- 2回目 基本設定とシンデレラ設定
- 3回目 設定の発表
- 4回目 進路選択で必要となる情報
- 5回目 卒業時のイメージの具体化作業
- 6回目 1週間のスケジュールと月間収支
- 7回目 25歳のときのイメージの具体化
- 8回目 家庭生活と仕事のイメージ
- 9回目 35歳のときのイメージの具体化
- 10回目 発表準備
- 11回目 発表

第2課題:自分自身のストーリーを描く

課題1の経験を踏まえて、自分自身の自らのストーリーをつくることを試みます。

3. 実際の授業の実施内容

授業開始を控えて更に検討を重ねた結果、より現実的なものに近付けるために下記の通り変更して実施した。

- 1回目 概要説明 設定準備
- 2回目 消費者力検定セミナー
- 3回目 グループ分け, キャリアに関する講義
- 4回目 消費者力検定セミナー
- 5回目 人物の基本設定

- 6回目 卒業時のイメージの具体化作業
- 7回目 設定したモデルの就職活動, 履歴書の作成
- 8回目 ライフプランニング①
入力内容の確定
- 9回目 25歳, 35歳時のイメージの具体化
- 10回目 家族の年表
- 11回目 ライフプランニング②
入力データの変更
- 12回目 まとめの作業
- 13回目 ライフプランニング③ 修正した内容を見ながらのレクチャー
- 14回目 発表準備 グループ毎にまとめの作業
- 15回目 発表 グループごとに10分ずつ
PowerPointを利用して発表した。

4. 実施状況

生活プロデュース学科1年生の後期の選択科目として、1週間に1コマ(90分)で開講した。ビジネス実務士の資格を得るための必修科目として指定した。履修者は58名であった。6~8名のグループに分けて行った。

実社会の中で生活していくことを意識づけるために、(財)日本消費者協会の協力を得て、消費者力検定の検定試験対策講座も取り入れた。1回目は生活していく中で留意すべき点についての講義、2回目は模擬試験とその解説で、計2コマ、外部講師により実施した。また、ソニー生命株式会社のご協力を得て、同社のライフプランナーによるライフプランニングについてのシミュレーションを行う演習を3コマ分取り入れた。

それ以外の回については、グループごとに架空の湘北生を想定し、話し合いの中で、その湘北生の生き方のシミュレーションを行うという形で実施した。家計の収支に関しては、ライフプランニングの講座との連携を図るものとした。

5. 学生グループが取りまとめたイメージ

ライフプランニングの進め方の都合もあって、全グループとも想定した人物が結婚する形となり、独身を通すケースはなかった。どのグループにおいても子どもが複数おり、子育て期間についてのイメージがなされたものとなっていた。グループの多くは、その際に休職するか、一旦離職して、数年後にパートタイムで働くという設定をしていた。事前に人生のスパンを長く捉えてイメージすることを提起してあったこともあり、あるグループは60歳以降に活躍する想定をつくりあげた。若干夢物語のような展開とするグループもあったが、ライフプランニングの講座を組み入れたことによって、非現実的な想定となることはなかった。

この演習課題が学生に対して、家庭生活、子育て後の夫婦の生活など、人生において避けることのできない状況について、想像を豊かに巡らせる時間を提供できたことは間違いのないと思われる。

VI 授業に対する学生アンケート

授業の最終回には発表会を行い、その終了直後に無記名のアンケート調査を実施した、8項目について記述式の回答を求めた。以下に、各質問項目に対して複数名が記載した内容を中心に紹介する。()内の数字は、同様の回答を記入した学生の数である。

1) 「キャリアセミナーⅠ」の授業を振り返って思うことは何ですか。

* これまで自分の人生を真剣に考えたことがなかったが、架空の湘北生の人生を作り上げていく中で、彼女の人生を自分自身に置き換えて考えていた。自分の将来を考えるよいきっかけとなった。(6)

* 架空だからなんでも好きなように人生を決めることができたが、実際は絶対にそんな風にはいかない。しっかり将来のことを考えながら人生設計をしていくことが大切だと思った。(5)

* 自分の人生は、今だけでなく、将来をしっかりと考えて行動しようと思った。(7)

* 人生は、楽しいことばかりではなく、思っていた以上にいろいろと大変そうだった。(5)

* 家族みんなで幸せに暮らしていくためには、計画性をもつことで、人生はよりよい方向に向けていかれるということを学んだ。(7)

2) 「消費者能力検定」の講座と模擬試験で学んだこと、感じたことは何ですか。

* 消費者として生活していく上で必要な知識を増やすことができたので将来役立つと思う。(27)

* 自分が「消費者」であるという意識がなかったが、深く関わっている衣食住に対して多くのことを学ぶことができてよかった。(4)

* 普通の生活の中にも知らないことがあり、びっくりした。(6)

* 検定を受けてよかった。(8)

* クーリングオフについて知ることができた。(3)

* このような資格があると初めて知った。生活に役立つ資格だと思う。(3)

3) 「ライフプランニング」の3回の講座で得られたことは何ですか。

* 貯金をする大切さを知った。(6)

* 生活していく中で、お金は必要不可欠なものだと実感した。(9)

* お金は計画性をもって使うことが大切だと実

「キャリアセミナーⅠ」新規導入の報告

- 感じた。(11)
- * お金の使い方や、使うタイミングを考えることは大切だと実感した。(5)
- 4) グループの中で自分が果たした役割は何でしたか。
- * 意見を積極的に出した。(15)
 - * グループリーダーとして頑張った。(4)
 - * みんなと協力して計画を立てた。(2)
 - * みんなの意見をメモした。(4)
- 5) 他のグループの発表を聞いて、感じたこと、考えさせられたことは何ですか。
- * 他のグループは、PR もよくまとめてあり、とても分かりやすい説明でよかった。(10)
 - * 平凡な人生あり、借金人生もあり、様々な人生をみることができ楽しかった。(8)
 - * それぞれ個性が出ていて、面白かった。(4)
- 6) 今の時点で、自分自身のキャリアの構想はどのようなものですか。
- この問いに対しては、希望の年齢はまちまちであったが、「まず就職、それから結婚、出産、仕事復帰」という回答が多かった。「平凡に」「幸せに」暮らしたい、というコメントもあった。
- 7) 授業そのものが「もっとこうであればよかった」と思える点は何ですか。
- * 特になし。(13)
 - * 予想していた内容とちょっと違った。
 - * もっと講義らしいものを取り入れた方がよかった。
 - * セミナーというより、ライフプランをグループワークを通して考えただけだったので、もっとキャリアということを知りたかった。
- * もっと違うこともやってみたかった。
 - * 毎回の指示がおおまかすぎて、進めづらかった。
 - * 何をすればよいのかが、分かりにくかった。
 - * 学生のころのプロフィールをせっかく決めたのに、すぐに大人になってしまったので、決めた意味が分からなかった。(2)
 - * 結局何が目的なのか、何が大切なのか、よく分からなかった。その辺りを分かるようにしてほしかった。
 - * 同じ人たちとの意見交換しかできなかったので、色々なグループでの話し合いをしたかった。
- 一方、この授業を肯定する下記のコメントもあった。
- * とても面白い授業だったので、よかったと思う。
 - * この授業形態は好きだった。
- 8) 自分自身が「もっとこうすればよかった」と思う点は何ですか。
- * もっと積極的に取り組みばよかった。(7)
 - * もっと積極的に意見を言えばよかった。(10)
 - * 発表の時、PRをもっと工夫すればよかった。(5)

Ⅶ 今回の「キャリアセミナーⅠ」実施

についての振り返りと今後の展開

架空の湘北生のシミュレーションを行うことにより、学生に対して、自分自身の人生で起こりうるさまざまな状況について考える機会を提供することができた。特にライフプランニングの講座との連携を図ることにより、金銭的な収支についての現実的なモデルを考える時間も設けることができた。そういう点からは概ね当初の企図どおりの

授業が展開できたといえる。ただ、プログラムとして全体的な統一感に欠けていたことや、話し合いが必ずしも活発とはいえないグループもあったことが、次年度の実施に向けての課題である。改善すべき点は次のとおりである。

- ・ 記入シートをグループで1部としたが、一人ずつ資料をファイリングする形とする。
- ・ グループの人数が8人の場合、全員が話し合いに参加する状況をつくるのは難しかったので、1グループ6名までとして運営する。
- ・ 発表準備の時間が乏しかったため、その時間をもっと設ける必要がある。
- ・ 話し合いは、常に同じグループ内だけではなく、時には違うメンバー構成で行うなどの工夫を要する。

消費者力検定の講座も学生には好評で、これまでに知らなかった契約のことなどの知識を得るためには良い機会であった。ただ、人生のシミュレーションという演習の中ではテーマが少しづれたものとなっている。同検定やライフプランニングの講座は、一連の授業内容との整合性をとる必要があるが、いずれも学生に好評であり、両講座とも社会生活のあり方をイメージする上で有効であるため、取り込み方法への工夫を図って活用していきたいと考えている。

Ⅷ まとめ

今回の授業では、グループで架空の湘北生をつくりあげ、その人生のシミュレーションを行った。その結果、仕事、家庭、家計、さらには年齢に伴う自身や家族の変化について、多くの学生に対し、体験的に学ぶ機会を提供することができたと考えられる。

川喜多喬氏は、著書(3)の「キャリアデザインは人生の仮説検証を教える」という節で、「ビジネ

スは思い通りにならないが好き放題に行動もできないから、職務現場で仮説をたて、実行しながらそれを検証し、仮説を作り変え、また顧客需要をかなえて、自分の収入源とする。」と語り、職業の世界で必要な能力はこのような「知的労働」の力であると述べている。今回導入した「キャリアセミナーⅠ」は、学生グループに卒業後の人生の仮説検証を行う機会を提供する授業であるといえる。

また、川喜多氏が、「キャリアデザイン能力の育成は、ビジネスに必須の能力の育成でもある。」と述べているように、検証部分にあたるプレゼンテーションの内容をさらに充実させていく指導をしていけば、「キャリアセミナーⅠ」は、社会で求められる能力も磨きうる授業となっていくものと思われる。

なお、「キャリアセミナーⅠ」に続いて2年前期に開講される「キャリアセミナーⅡ」という科目では、グループでOGが勤務する企業等を訪問する。先輩にインタビューを行った後、収録した映像を編集してまとめ、最後にプレゼンテーションを行うという予定である。実際の卒業生の生きざまを目の当たりにして、「キャリアセミナーⅠ」でイメージした内容の検証が行える場面を設けることが狙いである。

以上

謝辞

「キャリアセミナーⅠ」の授業の実施に際して、次のお二方には講師としてご協力いただきました。実社会に通じる内容の講義をいただき、本授業の内容の厚みを増すことができたことをここに感謝申し上げます。

財団法人 日本消費者協会 三浦佳子 様
ソニー生命保険株式会社 松村直輝 様

参考文献

1. 渡辺三枝子 編著 「キャリアの心理学」ナカニシヤ出版 2003
2. 渡辺三枝子 「勤労よこはま」16年6月号
「キャリア教育」を考えるキャリア教育の実践に向けて
3. 上西充子 編著 「大学のキャリア支援 実践実例と省察」経営書院 2007

The introduction of the New Program, “Career Seminar I ”
– learning through experience of making a virtual life plan –

IWASAKI Toshiyuki HASEGAWA Fumiyo

[abstract]

When we think about our lives, we have to take many aspects into consideration. Official life, private life, living expenses, upbringing of children, nursing of the old, and so on. The “Career Seminar I ” is a new course provided to give students an opportunity to think about those aspects by planning a virtual life of an imaginary Shohoku student. This is the report on this program and the proposition of the new teaching method of career development.

[key words]

Career development